

ダンス教育—からだへの注目

「身体」「コミュニケーション」からのアプローチ

佐賀大学 文化教育学部 原田奈名子

key words : からだ, からだの教育, ダンス, 体育, コミュニケーション

【問題の所在】

今日様々な視点でからだに関する問題が指摘されている。身体の物化, 身体の加工, 身体の規律化・秩序化, あれる身体, かかわれない身体・沈黙する身体, 危うい身体, 等である。

こういう時代にあって, また大学体育の大綱化や学校週5日制と教科再編・統合をめぐる論議の中で体育科の存立根拠や, その領域構成論の根拠も問われている。このような情勢を念頭におき, ダンス領域しかできない, また, ダンス領域に期待できる「からだの教育」について, 「身体」「コミュニケーション」の観点から論じたい。

【本論】

1. コミュニケーションの一般的概念

コミュニケーションの概念は視点のおき方や立場の違いによってさまざまに捉えられているが, 「人間関係が成立し, 発展するためのメカニズム。シンボルを空間に搬送し, あるいは時間的にこれを保存する手段 (Cooley, 1909)。刺激を伝達する過程 (Hovland, 1953)。ラテン語のCommunisに由来し, 共通性を成立させる情報, 思想, あるいは態度を共有しようとする試み (Schramm, 1954)。相互通行的, 進行的であり, また行動に影響を及ぼすプロセス。ある媒介を通し送る行為 (Samovar他, 1981)」に代表される (林, p31)。これらの定義には共通して, 伝達する主体, 伝達されるメッセージ, 媒体, 受け手という過程が読み取れる。

2. ダンスにおけるコミュニケーション

コミュニケーションは上述のように一般的には「伝達」という言葉で総括的に特徴づけられ, 自分と自分以外の誰か (何か) と関係する事に関して用いられる。ダンスにおけるコミュニケーションをひとまず以下のように分けて考えてみる。

1) 外 (他者・外界) とのコミュニケーション

さらに, 次のように分けることができる。

①鑑賞関係のなかにおける「伝達」という意味②複数で作品創作する際の「共同」「協力」しながら創りあげてゆく過程にみられる構成員同士の関わり③即興的な動きでお互いに「感応的に関わりあう」関係・「共感」関係, あるいは踊り集う「時空を共有する一体感」の関係, などである。これらのコミュニケーションについてもっと詳しくみていこう。①の「伝達」とは, 踊る側の描いたメッセージをからだと動きを媒体として観客側が受け止める過程である。ゆえに「伝

達」と位置づけられる。しかし, 受け手側が意味や内容を知的に推察していると同時に, 皮膚は鳥肌が立ったり, キュッと閉じたり, 呼吸が荒くなったり・つまったり, 筋肉の一部が緊張したり・緩んだり, 熱くなったり, 瞬時瞬時にさまざまにダイナミックな反応をしている。受け手はそのような身体変化に気づかなくても, 結果, 感動したり, 落胆したりするのである。からは, 自立的に共感・共鳴・反発し, 先のような身体の変化をおこすのである。②の「共同」「協力」の活動は, 言葉で理解を確認しながら進められる。この活動は一見, 一般の会話と同様である。しかし構成員は互いに提案した動きをめくり, その動きが自身の, あるいはグループの追求している世界にふさわしいかを探り, また, 描こうとしている世界それ自体も探るのであり, この活動を前提とする会話的活動なのである。構成員は提案された動きを見るだけでなく踊りながら探究する。見ているときには①で述べたような身体の反応が起きている。さて, 踊っているときはどうだろうか。③の「感応的に関わりあう」関係・「共感」関係, 「時空を共有する一体感」の関係には, どんなコミュニケーションが働いているのか。伝達する主体, 伝達されるメッセージ, 媒体, 受け手, という捉え方では説明できない, もっと感覚的・直接的で, なおかつ抽象的な交流があるようおもわれる。①で述べたように身体が自立的に反応・判断しているのではないか。

2) 内とのコミュニケーション

仮に内とのコミュニケーションという設定をしてみよう。先の①②③では, すべて, 我が, 我が身体に起きたさまざまな変化を感じとり, それを基に考え, 意志し, 行動したのだろうか。感じているという認識以前に, 既にからが反応・判断していないだろうか。「内的コミュニケーションとは思考過程を指す」概念である (岡部, p9)。

3. コミュニケーションとしての身体

身体を, 内でもない外でもない, その境界さえ定かではないと捉えてこそ, ダンスにおける身体を捉えられるのではないか。また, 我々の身体は, 全て脳がつかさどるのではなく, 内部環境・身体各部・各組織・各器官が細胞単位, 組織単位で自立性をもって活動をし, この自立性をもったそれぞれが, いわば脳のような働きを働かせ, それぞれがそれぞれの外界に対して, 緊張関係もちつつ相互にかかわり合い, 一人の人間の中でバランスを取り合っているとしたとき, そういう前提に立つとき, コミュニケーションも伝達の意を含まない「交わり」の関係として位置づく。「交わりは手段的コミュニケーションと目的的コミュニケーションをつなぐ統一物であり, 行為的コミュニケーションと呼ぶ事ができる。」(尾関, p21~25)

【まとめ】 この意味でのコミュニケーションがよく働くからだを育て, そういうからだだからこそダンス世界に価値があるのではないだろうか。